

N24
1
97[2]

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

1998

7

1998.7.21



第97巻 第7号 日本幼稚園協会
附属図書館

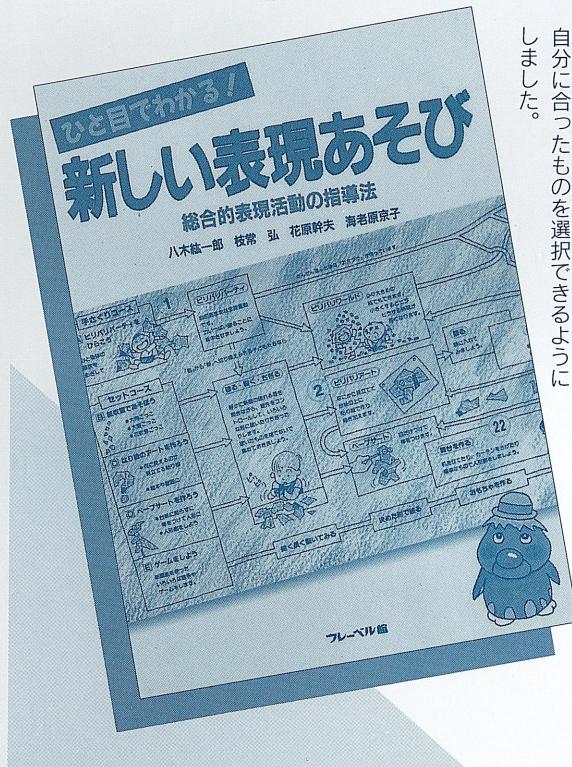
ひと目でわかる！

新しい表現あそび

総合的表現活動の指導法

八木紘一郎・枝常 弘・花原幹夫・海老原京子／共著

B5判 112頁 定価：本体1,900円+税



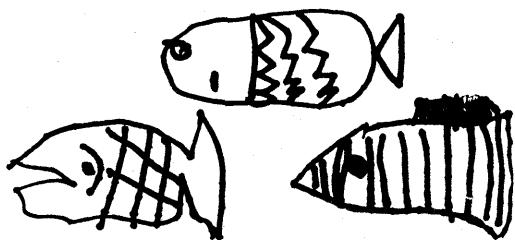
初めての試み、フローチャート化

- “表現の総合的展開”的立ち上げから、多様な展開のようすが一目でわかるようにチャート化しました。
- 指導しやすいように、子どもの発想を基にした「手さぐり」コース」と保育者が活動の流れを設定する「セット」コース」を設けました。
- 流れにそつて発展できるように38例の製作資料を上げ、自分に合ったものを選択できるようにしました。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第97卷 第7号



幼児の教育 目 次

— 第九十七卷 第七号 —

© 1998
日本幼稚園協会

「児童の世紀」を振り返る——その八——

本田 和子 (4)

スラム街と難民キャンプの子どもたち

小林 美実 (14)

自分らしさが響きあう保育実践の創造を

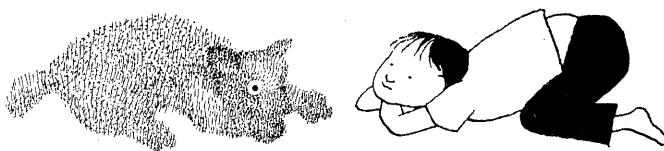
加藤 繁美 (20)

幼稚園の日々 小さなもののきらめき

樋口早百合・無藤 隆 (27)

砂の中に手をかくす

津守 真 (30)



仮想世界に出口はあるか——情報社会のなかでさまよう心—— 山本 政人 (36)

ある日の育児日記から⑨)……………佐藤 和代 (43)

子ども時代と私(II) 都心生まれの大正時代…………塙本 福 (44)

夢の日々(六) 次の「夢の日々」へ出発……………大多和 檀 (50)

今、大切にしたい」と……………尾形 節子 (54)

子どもの本から 本に願いをこめて……………皆川美恵子 (60)

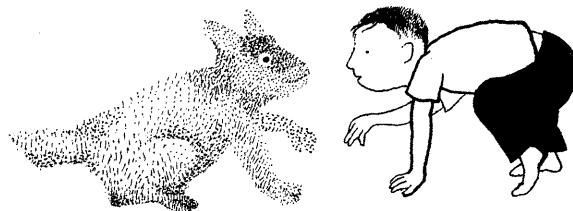
表紙絵／佐藤 寛子
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ひまな人」

編集委員／田代 和美・上坂元絵里・吉岡 晶子

編集部／仲 明子



「児童の世紀」を振り返る

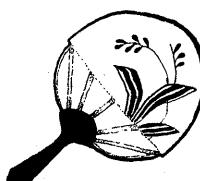
その八

本田 和子

アリエス・ショックをめぐって

状に不安を抱き始めた人々の間に、より広範囲に広がつていったというべきであろう。

Ph・アリエスの登場は、子どもをめぐる知の世界に一種の衝撃をもたらした。ただし、前回も触れたように、この衝撃が引き起こした波動は、子どもと直結した「教育」の世界ではなく、子どもの現代からの仲間たちで結成した「ムチ（無知）の会」



という自主ゼミでは、一九六〇年代にアリエスをテクストに取り上げていたとのこと。プロン社版でアリエスの『アンシャン・レジーム期における子どもと家族生活』を購読したというから、着眼点の早さは瞠目に値する。しかし、アリエス的発想が子ども観の更改を示唆する新しい流れとして、大きく浮上してくるまでには、少なからぬ時間が経過している。とりわけ、それが、「教育を考える一つの視点」として認証されるためには、現在でも、なお、いささかならぬ時間不足が指摘されるかも知れない。

因に、外国の事情にさほど敏ではない私など、アリエスの論稿に直接触れるには、一九七〇年の英語版の出現を待たねばならなかつたのだが、ただ、あるとき先のメンバーの独り為本六花治の論稿に触れて、「オヤ」と目を見張られた記憶がある。確かに、学校教育に関する一節のなかに、学校を近代の

生み出した「閉ざされた制度（エンクロージャー）」と位置付ける見解があつて、それが、私の目を引いたのであつた。学校教育と言えば、「学校」という存在そのものは自明として、中味への言及のみが跋扈していた当時にあって、「学校」を近代の生み出した一種の装置とする指摘が新鮮だったのである。

この考え方は、ミシェル・フーコーに近いといふ驚きもあつた。監獄や病院など、異質の他者を囲い込むための多種多様な制度の産出から近代を論じたミシェル・フーコー的思想が、教育の世界にも適用可能かという発見もある。やがて、アリエスのこの論稿は、一九七〇年に『児童の世紀 (CENTURIES OF CHILDHOOD—A Social History of Family Life—)』という英訳本として世に問われ、アメリカ合衆国で大きな話題を呼んだ。以後、本国のフランスでも改めて再評価の気運が起ころる。

そして、従来は、大学の教職を持たなかつたこともあつて「日曜歴史家」などと呼ばれていたアリエスが、アナール派歴史学を代表する一人として社会科学院の主任研究員として招聘されるなど、彼自身の学者としての位置付けも大きく変化したことは周知であろう。ということは、今世紀の後半に至つて、時代がアリエス的思考を必要とし始めたといふことでもある。

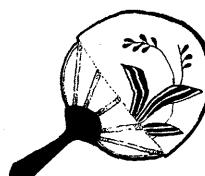
一九七〇年代は、アメリカ合衆国における子どもや若者の反乱の季節であり、校内暴力等に手を焼く関係者たちが、子どもに対する「まなざしの更改」を迫られていた時期でもあつた。「なぜ、私たちには、いまの子どもが見えなくなつてゐるのだろう」と「私たちの子ども観は、もはや破綻の危機に瀕してゐるのではないか」、こんな思いに押し潰されそつな関係者たちのなかで、「子どもとは時代のまなざしの所産である」とするこの見解は、子どもの世界

への新しく開かれた「窓」として受け止められたのでなかつたろうか。

わが国におけるアリエス・ショックは、アメリカ合衆国よりも一〇年遅れの一

九八〇年代に訪れている。このことは、わが国の人間事情が合衆国のそれに比して、おおよそ一〇年は安泰であったことの証しとも言い得ようか。確かに、私どもの周辺で「子どもが異星人のように見える」などという声がしきりとなり、親や教師たちの間に従来の大人—子ども関係の解体が囁かれ出したのは、一九八〇年前後だったのである。

しかし、先に触れたように、アリエスによって提起された問題は、子どもと直結した教育界には直接的に影響せず、むしろ、広く知の世界全般に波及して様々な論議を呼び起こした。たとえば、日本教育



学会のシンポジウムの席上で、教育史学者中内敏夫は、教育史の新視点というかたちで、アリエスを踏まえた問題提起を試みている。しかし、フロアから格別の応答もなく反響が薄く見えたことからして、斯界におけるアリエス・ショックはさほどものではなかつたらしい。それに反して、いち早く言及したのが哲学者の中村雄二郎であつたように、こぞって反応を示したのは思想界のオピニオン・リーダーたちであった。柄谷行人の「子どもの起源」に関する論稿は、優れてアリエス的でもあつて、脱近代的思想を摸索する若者たちに反響を巻き起こしたことは先に触れた。結果として、わが国のアリエス・ショックは、こうした不思議な形でその波紋を広げて行くことになる。そのゆえに、「いま、△子ども」という言説も／＼は、アリエス抜きでは語り得ない」という意味はある面から見れば真実と言い得るが、別の面からは必ずしも真実とは言い難い。

なぜなら、このことは、子どもが単なる教育やケアの対象であることから脱して、「子ども」という存在そのものの意味において語られるようになつたことと連動している。すなわち、真っ向からアリエス・ショックを受け止め、まなざしの更改によつて「子ども」を捉え返そうとする試みは、主として後者の立場、すなわち、「子ども」を意味的存在として語ろうとする人たちのものであり、前言は、これらの人にとってのみ真実だったからである。

子どもをめぐる心性と社会の歴史

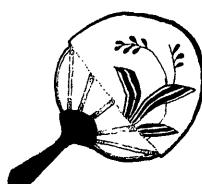
私どもの眼前に佇む「子ども」とは、単なる生物的存在としての未熟な肉体の持ち主ではなく、「純真・無垢」あるいは「子どもらしさ」、さらには「発達可能態」とか「未来指向性」などという様々な意味に染められた社会・文化的産物に他ならない。そして、彼らの肉体にそれらの意味を染め付けるの

は、個々人の子どもも観を越えた「時代のまなざし」とでも言うべきものであろう。現在の子どもが、私どもに見えなくなりつつあるとすれば、そのまなざしが破綻しかけていることを意味する。となれば、この「まなざし」の生成の過程を見定め、それに固執することの愚を改めて、新しい視力の獲得を望むことこそ肝要ではないか。

アリエス・ショックの生産的な帰結は、おおよそ、以上のように要約可能だろうか。アリエス以降、新しい視点からの「子ども史研究」が活性化したのは、このことの見える形の結論とも言い得る。歐米諸国で、十七、八世紀に視点を合わせた子ども研究が続出するのも、このことを証しする例である。しかも、アリエスのもたらしたものは、「子ども」の暮らしの実態を明らかにするにまして、彼らに注がれた「まなざし」を跡付けるという、その視点であり、「子どもとは、時代の心性の所産であ

る」とするそのテーマで
あつたから、アリエスに触
発された研究は、このテー
ゼを是として、より厳密に
それを検証しようとするも
の、すなわち、アリエスが
捨象した特定の地域や階層に関して詳細に「子ども
発見」の軌跡を辿ろうとする研究と、批判的立場に
立つて、十六世紀以前に時代を遡らせつつ「不变の
子ども観」を抽出しようとする試みに二分された。

さらに、活況を呈したのは、「青年」や「家族」
に関する同様の視点からの検証である。歐米諸国に
出現した「青年」もしくは「青年期」という概念の
誕生を跡付けた多くの研究や、ドイツ、イギリス、
オランダ等、政治体制と近代化の過程の異なる各国
に焦点を合わせて、「家族観・家族像」の変遷を跡
付ける試みの多出など、心性史・社会史という



ニュー・コンセプトが、子どもや若者、あるいは家族の研究に生じさせた新しい動きであった。

と、それと同時に、アリエスが活用した資料の多彩さも、関係者の目に新鮮に映じた。彼は、墓碑銘・個人の日記や書簡・肖像画・衣服・玩具、あるいは家屋の形態等、従来は民俗学資料に活用されこそすれ、歴史研究からは除外されがちであった「無名の個人の文書」や「もの資料」を多用することで、匿名の人々の歴史研究の可能性を示唆したのである。そのための資料として、正統的歴史資料たる公的文書類にのみ依拠せず、日記・書簡等の私的文書類や、図像・玩具・衣類等の物質資料、さらには、子ども部屋やそこに置かれる家具類等、従来とは様変わりした日常的諸種の遺物が活用され、子どもに注がれる時代の「まなざし」の抽出が試みられたのである。

確かに、子どもの生にかかる諸事象は、王位継承者のような特別の存在は別として、公的資料として保存される機会を持たない。女性や老人、あるいは庶民の家族も同様である。結果として、従来の歴史は、王や武将等、権力者のそれであり、彼らによって行われた政治や戦いの歴史であった。その時代を支えたであろう多くの名もなき人々、底辺を生きた多くの庶民や女・子ども・老人等は、いずれも歴史の流れの底に息を潜め、あたかも存在していないかったかの如くに無視され続けるのが常であった。これに対して、アリエスの手法は、彼らに息を吹き返させ、歴史の表層にその姿を浮かび上がらせることが可能にしたのである。

「常民の生活」という言葉で、匿名的に生きた過去の人々に視線を合わせようとする試みは、民俗学者柳田国男の嘗みでもある。古⽼の語りや残存する民間儀礼などの採集を通じて、過去に生きた普通の人々の暮らしのありようと、そこに反映された意識

・無意識を探りだし、それらを私どもの祖先の「心

意の生活」と位置付けて保存することが、柳田民俗学のねらいだったのである。

ことは、アリエスに限られない。「教会の鐘」と「広場の時計」を手掛かりに、新しく勃興した市場

原理とそれを支える心性を論じる企てや、ナイフや

フォーク等、食卓に置かれる食器類のありようを通じて、中世的心性から近代的心性への変貌を跡付け

る試みなど、この時期にアナール派歴史学者たちの提示した新動向は、過去に関心を抱く歴史学者と民俗学者、時には博物学者も含まれることもあるが、彼ら全体にとって刺激的であった。それは、この両者、あるいは三者の間に、幸福な蜜月が到来するかと期待されたのである。

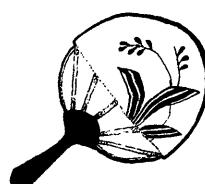
ところで、アリエスに限られないが、アナール派学者として登場した彼ら歴史学者たちは、いま、焦点化している対象は「手掛けり」であり、「切り口」

に過ぎぬと説明していた。

すなわち、「子ども」や「時計」、あるいは「食器」の変遷を実態として解明することが本来の目的ではないと言うのである。

「老い」や「死」をも主題化しているアリエスは、このことに関して次のように説明している。すなわち、「子ども・老人、あるいは死に瀕したものたち」に視線を合わせることで、時代の表層に浮かび上がることなく、深層にたゆたい変化を遂げつつ流れ続ける人間の心性に鍵を降ろすことが出来るから、と……。

したがつて、アリエスの仕事は、「子ども」の歴史を時間を追つて忠実に紡ぎ出すことではなかつた。古い時代に子どもがどのように生き、どのように成長を遂げたかをあらわにする営みは、そのこと



自体を目的とするのではなく、そのことを通して、
当時を生きた人々の意識・無意識がどのような変遷
を迎ったかを明らかにしようとしたのである。

しかし、等しく人間の心性発掘の試みと言つて
も、対象化されるのが「子ども」である場合と「死
に瀕した人たち」とでは、自ずから違いが見られる
のは当然であろう。要するに、浮かび上るのは當
時の人々の心性に他ならなかつたとしても、そこに
クリアとなるのは「対象化されたものたちと時代と

の関係の結びよう」であり、「子ども」に限つて言
えば、「子どもと大人との関係のありよう」と見る
ことも可能である。したがつて、アリエスに触発さ
れて明らかになつたのは、「子どもの歴史」とは、
つまりところ「子どもと大人との関係の歴史」以外
にはないということだったのである。

江戸研究と「子ども」との出会い

わが国の場合、「子ども」を直接の対象とする研

究者たち、たとえば発達学者や教育学者がその代表
例であるが、これらの人たちの間でアリエスの直接
的影響は薄く、家族史研究の活性化に比して、子ど
も史研究にさほどの動きは現れなかつたかに見え
る。とは言え、先に言及した中内敏夫のグループ
や、「子どもと大人の関係史」構築を志向していた
宮沢康人のグループでは、従来と異なる新視点に
立つた「子供史・教育史」の研究が軌道に乗り始め
ていた。

一方、同じ時期に、新しい「江戸研究」が蠢動し
始める。すなわち、「江戸」という時代が、従来、
定説化されていた封建的・抑圧的な暗い時代ではな
いという発見である。都市町人階層は言うまでもな
く、底辺の庶民層や女・子どもの上にも、また、彼
らが形成する小さな家族の上にも、変化の兆しが見
いだされるのだから。そして、彼らが、徒に土農工
商の身分階梯に呪縛され、武士階層の制圧の下で息
を殺して生きていたわけではなかつたという、新知

見が提示されたのである。

この動きは、外国、とくにアメリカ合衆国の歴史

学者らに触発されて起つた。彼らは、西欧諸国が

領土や王位継承の争いに明け暮れている同じ時代

に、島原の乱以降、一度の内乱もなく三〇〇年にお

よぶ平和を維持して、庶民層に安定した生活を保証

した徳川体制に新鮮な関心を寄せたのである。結果

として、偏見のない江戸研究が積極的に推進され

る。江戸の前半期に増え続けた人口が、どのように

して維持されたのか、旱魃や洪水など度重なる自然

災害は、どのような治世で切り抜けられたのだろう

か。さらに、徐々に進行する文字情報の時代に、庶

民はどうな適応手段を講じたというのだろう。

そしてまた、三〇〇年の泰平は、どのような文化を
生み出したのだろうか。改めて振り返るなら、わが

国の十七、八世紀は、このように、知的関心をそそ
られる題材に事欠かない。こうした異国の研究成果

に活性化されて、わが国の

江戸研究が俄に新しい様相

を呈し始めたのである。

それら江戸研究の一環と

して、アナール派の特色の

一つでもあつた人口動態を

鍵概念とする研究が浮上し、それに触発されて人口

の増減と子ども観の変貌も主題としての位置付けが

明確化する。その結果、従来は民俗的事項として扱

われていた「間引き」の問題などが、幕藩体制下の

人口政策を伺い知る手掛かりとされ、また、小児疾

患への対処法が医学の発展を垣間見る格好の話題と

される。その結果、子ども関連諸事象が、江戸を解

明するための史的課題たり得ることが認識されたのである。

具体的に例を上げよう。「間引き禁止」を告げる
通達が頻出し、あるいはその不道徳性を糾弾する啓



蒙文書類が市井を徘徊するのが、江戸後期であるが、これは、農村人口の減少防止が政治課題として浮上してきたことを意味する。また、流行する天然痘への対処が、「疱瘡神」を祭ることから予防的に薬草を使用する形へと変化する動きは、療法そのものは非疫学的ではあるが、疾病への対応が呪術から医術へと推移し始める心性の変化を指示するだろう。かつて、村落共同体への加入儀礼であつた新生児の「氏神参り」は、江戸後期には、単なる子ども成長祈願へと変化を遂げる。この経緯が物語るのには、村落共同体が崩壊し、それまではその絆のなかに安らいでいた人の一生が、家族という小さな単位に委ねられ不安定に揺らぎ始めていく過程を物語るものと言えよう。

こうして、江戸研究は、思いがけず、十七、八世纪の子どもに注がれたまなざしを浮上させ、逆に、それを鍵として、江戸後期の時代的心性を垣間見せ

る結果を導き出した。一九八〇年代後期に、民族学博物館、歴史民俗博物館等の研究機関が相次いで子どもを主題とするプロジェクトを組み、史的・民族学的視力によつて「子ども」を追跡すること企てたのは、こうした動向の現れと言えよう。

しかも、この「江戸研究」と「子ども研究」の提携は、先のアリエス・ショックの残存効果の一つでもあつた。すなわち、直接的にアリエスを継承あるいは追試するのではないか、彼の提示した「子ども発見」のテーマを下敷きとし、わが国流に近代的な「子どもの誕生」を跡付けようとする試みでもあつたからである。

(聖学院大学)

スラム街と

難民キャンプの子どもたち

小林 美実



「タイのバンコクの幼稚園を見てきたけど、ひどいところがありましたよ。一緒に行った若い先生たちは、鼻と口をおさえてました」。昨年夏休みに研修旅行に出かけたある園長の話だった。たしかめてみると、やはりクロントイの幼稚園のことだった。クロントイは世界有数の大スラム街である。しかしそこにある私立プラティープ

財団の幼稚園、小学校については多くの人に知つて欲しいことが沢山ある。まずそのことについて書いてみたい。

私がはじめてタイを訪れたのは一九七六年（昭和五十年）だった。当時のタイは、経済発展の緒についたばかり、今のような高層ビルや高速道路は全く無かつた。

しかし歴代の賢明な王によって、西欧の強国の支配下におかされることも、第二次世界大戦の戦禍にまきこまれることもまぬがれたこの国は、いたるところに王宮、寺院、史跡があり、アジアの異国情緒を満喫できる町並みや田園風景があった。その頃何度か訪れたドゥシット教員養成大学や私立学園の幼稚園などは建物、内容共に立派であり、なによりも日本に戦前に留学され、アール・ウイン先生（玉成保育専門学校の創設者）に学んだ方や、お茶の水女子大留学の先生もいらして、保育室に日本本の雑誌や教材もあった。見学した有名なチュラロンコン大学の学生たちは勿論、伝統芸術・芸能者を児童期から養成する国立芸術院の子どもたちの熱心さにも驚かされた。ミュージカル「王様と私」の舞台となつた王宮と王一族を中心に、信仰心の厚い仏教徒が幸せに暮らす国タイ、それは南国の人的心も穏りも豊かな国であった。

一九八三年（昭和五十八年）のこと、バンコクに約五十万人が住みついている大スラム街クロントイにボランティア活動で訪れた私たちは、まずそのままじいまで

に酷い環境に驚いた。そこはバンコクに隣接するクロントイ港周辺の葦が茂る湿地帯で、汚物が浮かんだ黒い水がよどんでいる。その湿地や水の上に浮かぶように建てられた粗末なトタン屋根のバラックは、杭の上にすのこのような板を敷いただけの道でつながっている。黒い水に腰までつかって、拾ってきたビニール袋を、町で売るために洗っている女たち。市内で車が信号で止まるごとに腰までつかって、窓を拭き金をせびる小さい子どもたちが、このスラムの子どもたちであることも知った。

それでもっと驚いたのは、粗末なバラックではあるが、このスラムの一画に、まだ教員になつたばかりの若い女性が、自力で幼稚園を含む子ども数一二〇〇人の学校をつくついていたことだった。ただ囲いのあるだけの土間のせまい場所で、子どもたちに人形劇や子どもも参加しての劇などを演じた時のことは忘れられない。こんな生活をしながら、どうして体いっぱいに喜びを表して反応することができるのだろう。三回公演の間に子どもたちと外で遊んだが、どの子どももいきいき、さびしごと

元気いっぱいに遊ぶ。生きていることが本当に嬉しいのだ。この学校の存在が如何に大きいか。子どもたちは幼稚園や学校にくることで子どもらしい時間と生活がもてるのだ。ここで仲間と遊んだり勉強したりすることの幸せをいっぱい感じている。すばらしい笑顔だ。子どもたちと一緒に昼食を食べることになった時、小さいバケツ一杯の水が私たち十数人分の手洗い用として用意された。ここでは水は貴重な宝である。一人コップ半分の水に感謝しながら、土埃で汚れた手を洗った。

この後何回かこの幼稚園を訪問した。スラムも次第に環境整備され、道路もつくられ、小さい店も少しづつできて街として整ってきた。幼稚園も小・中学校も立派な建物に変わり、裸足やせいぜいゴムぞうりだった子どもたちもお揃いの制服になった。それでもバンコクの市内の発展にくらべれば貧しい生活である。しかし子どもたちちは変わらず元気だった。保育室に沢山の指人形をみつけた時は嬉しかった。創立者プラティープ・ウンソンタム女史はボランティアとして協力していた日本の曹洞宗

の若いお坊さんと結婚され、ますます活躍させていた。タイは他のアジアの国々と同様、最近までめざましい経済発展を続けていた。しかし発展する都市部や豊かな



▲当時のバンコクのクロントイの家

農村部と、慢性的な貧困状態を改善できない地方との格差は広がるばかりであった。依然として貧しい農村部（特に東北部）から沢山の人々がバンコクに流れ込んできている。このクロントイばかりでなく、注意してみると市内の鉄道線路の両側や、どぶのような川の附近にも小規模のスラムがある。売春に加えて、今、麻薬やエイズが大きい社会問題となっている。そしてタイではそれは即子どもの問題であるのだ。経済的な不況に陥っている今、クロントイの子どもたちの生活が悪化しているという。二十年前は、貧しいけれど元気一杯の笑顔の子どもだった。今私たちに何ができるか、再び考えたい。

一九八〇年（昭和五十五年）当時タイとカンボジアの国境に国連によつて設置されていた「カンボジア難民キャンプ」を訪れた。サケオやカオイダンなどのキャンプ名は日本でもテレビや新聞でよく知られていた。この二つのキャンプだけでも、当時十四万人の難民が収容されていた。タイでは、自國のスラム街をはじめ貧しい地

方の問題が解決されていない上に、隣国の内戦の難民を受け入れることに対し、不安や不満があるようだつた。実際に国境付近の農村地帯を歩くと、キャンプに食料などを輸送する国連のトラックを見ながら、貧しい生活を続ける人、戦争の恐怖から離村した人など、不満も当然と思われることも多かつた。その為、キャンプ内の子どもたちだけでなく、国境から二キロ以内の農村の子どもたちにも、人形劇や参加劇で、平和な楽しい時間をすごしてもらうことにした。

さて、ここで最も強く記憶に残つてゐること、それは「サケオ」のキャンプでのことである。キャンプにはいると異様な緊張を感じた。今戦場から逃げてきたばかりの沢山の人々（女性と子どもが目立つた）が一列に炎天下の赤茶けた土の上に座らせられていた。その列から二メートルほどの間隔をあけて、持ってきた荷物が並んでいた。人々の顔は暗く疲れきっていた。兵隊たちによる所持品の検査がはじまり、スペイがまぎれこんでいることもあり危険だと私たちは遠ざけられた。兵隊たちは銃

を持ち、胸には手榴弾をさげていた。

やがて公演場所の少し大きいバラックで準備をしてい る時のこと、数人の子どもたちがやってきて、そばの水たまりで遊びだした。その水たまでは砲弾の炸裂した後らしく、深くて赤茶けた水がたまっていたが、そこへ走ってきては足からとびこみ互いにそのかつこうがおかしくて笑いあつたり、大声ではやじたてたりしていた。また一人の子どもは、細長い棒を見つけてきて、その両端に拾ってきた空き缶を草で結び付け、大人の水運びの真似をして、水たまりから水を汲んでは肩にかつぎ、そ のあたりをよたよた歩いてはみんなの笑いをきそうのだった。キャンプの大人たちの不安と緊張のまざつた暗い無氣力な表情や動き、それとあまりにちがう子どもたちの活発な明るい遊ぶようすに驚いた。キャンプには いつて、ここが弾のとんで来ない所とわかると、子どもはすぐ遊びだすそうである。勿論遊び道具などはあるわけがない。子どもはたくましい。何でも遊びにしてしまう。当然のことながら、戦争の恐怖と将来の不安にじつ

と併むだけの大人たち。このちがいを見ながら、子どもたちの将来が明るいことを祈るばかりだった。

私たちの公演に続けて、おかえしに、子どもたちの踊りを披露したいとの申し入れがあつた。キャンプの子どもたちのための小学校を設立する準備をしているグループが、子どもたちの故郷の伝統舞踊を教えていたそ で、はじめてみんなに披露したいとのこと。喜んで一緒に公演することにした。子どもたちの踊りは、涙なしには見られなかつた。孤兎もふくめ、どの子どもも戦火をくぐつてカンボジアから逃げてきた子どもである。しかしその表情豊かなこと。生きているという実感を、やつとつかんだ幸せな生活の中で踊ることで、精いっぱいあらわしている。その喜びが見ている私たちにいたいほど伝わってきた。楽器は、とにかくあるものを集めて、大 人たちが伴奏した。その人々の顔にも、周りをうめつくす沢山の観客の顔にも、やつと明るさが戻ってきた。キャンプの生活はつかの間の平和であるはず。そのことを子どもだつて知つてゐる。しかしこの子どもたちのた

くましさ、今を生きることへのエネルギーのすごさ、私たちは圧倒された。大人たちが子どもに助けられている、生き続けるためのエネルギーを子どもたちにもらっている、そのように感じた。

やがてカンボジアの戦火がほぼおさまり、キャンプの

◆人形劇を観るために集まつたいっぱいの観客



人々は祖国、或いは他国に移住しなくてはならなくなり、国連の職員らにより、移住先の希望の聞き取り調査が行われたことをニュースで知った。それから数年たち、一人の調査官だった人から、私たちの公演のことを覚えていた難民がいたことを聞いた。「あの時は本当に面白くて楽しかった」と話してくれたそ

である。そして、その家族のアメリカ移住がかなえられなかつたことを、その人は悲しきと後悔の気持ちをいっぱいに表して、私たちに話してくれた。キャンプでは、子どもたちの年齢はよくわからなかつた。多分十分には育つていなかつたと思う。今どこで、どうしているだろうか。忘れられない子どもたちである。

(宝仙学園短期大学)

自分らしさが響きあう

保育実践の創造を

加藤 繁美

小学一年生がおかしい……

小学校低学年を担任する教師から、「最近の一年生

は何かおかしい」という訴えを受けることがよくある。もちろん、小学校一年生のクラスに、最初から何も問題のない子たちが集まり、授業が難無く成立する自然なことなのである。

ところが多くて教師たちは、そのことを十分承知した上で、「それでもやっぱり何かおかしい」と訴えてくる。私自身、最初の頃はこうした問題を、教師の力量の問題と考えて対応することが多かったのだが、こ

の五年くらいの間に、どうもこれは、単純に教師の個人的力量の問題として考へるだけでは片づかない何かが、子どもたちの中に進行しつつあるのではないかと考えるようになつてきた。

事実、私自身のこんな実感を裏打ちするかのようには、『日本経済新聞』（一九九七年十月八日）は

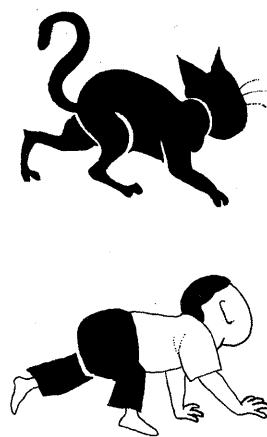
「ちょっとへんだぞ／小学一年生」という特集記事を

掲載し、さらに同種の問題を『日本教育新聞』（一九九八年二月二八日）も「育ち足りない」子どもたち」と題して紹介している。たとえばそこに登場していく東京・稻城市の「一年担任会」で出される子どもたちの様子は、次のような感じなのだという。

あせんとしたのは入学式当日だ。式場を退場する時、ある男子と手をつなごうとしたら「何すんだよ」といきなりひじてつをくわされた。「ごめんね」といつて肩をそっと抱くようにしました。人のとかかわりが希薄だったんでしようね。その

時、この一年心してからねばと思いました」と振り返る。「アスレチックのトンネルくぐりをしてる子の上に砂をかける子」「水道の蛇口に手をあてて友だちに水をかける子」「注意すると大泣きする子」と、担任会では子どもたちの様子が次々に出される。

教師に手をつながれて「何すんだよ」はないような気もあるが、報告される事例そのものは、それだけ



取り出せば別に目新しい問題とは言えないようと思われる。これまでそんな子どもならどこの学校にもいたような気がするし、その現実から教育が出発するんだと言われば、それはたしかにそのとおりなのである。しかしながら教師たちは、そうした問題が生じたときに、これまでだつたらトラブルをくぐつて子どもたちは、何とか自分を立て直すことができたのだが、今はそれが極端に困難になつていると主張する。

たとえば、子どもたちが教室の中で座つていられないし、ちょっととしたことで、パニックになりまます。何か課題を与えた時に、その課題ができないということでパニックになる。一回パニックになると、しばらくはおさまらない。バカヤローだの、人殺しだの、いじめるなーだの、ありとあらゆる言葉を発して、しばらくはおさまらなくなります。

私が出会った子の例では、自分がパニックになりますと、机をバーンと倒したり、物を投げたり、給食を投げたりで。パニックがおさまるまではしばらく見守るしかなくて、強くすると、なおずうつと止まらなくなつてしまふ。

(『教育』一九九八年十月)

もつとも私としては、こうした事例をもつてただちに「今の子どもたちは」と断定的な話をする気は毛頭ないし、子どもたちをすぐに問題児に仕立て上げ、それを分析することで子どものことを理解した気持ちになる最近の風潮に与する気持ちもさらさらない。

しかしながらそはずはいうものの、それではまるで二歳児のダダコネのような姿を見せるこの一年生たちの現実を、特別な事例として無視していいかというと、やはりそれも誤りなのだろうと思つてはいる。実際、同様の問題はすでに幼児後期の段階で、かなり深刻な形で現れてきているし、またそうした問題が、乳

幼児期に形成されるべき人間的能力の歪みとして表面化していることは、おそらく間違いないことなのだから。

大人の要求に過剰適応気味に生きる子どもたち

この場合見落としてはならない点は、ここでいう「人間的能力の歪み」の現実は、何も先に登場してきただ小学一年生のような形で表れる「荒れ」に限定されるわけではない点にある。いやむしろ、ある意味でこ

うした「荒れた」子どもたちの対極に位置する「いい子」たちの中に、実は形を変えた「心の荒れ」が広がっているというのである。そして、時としてこちらの方がむしろ、問題は深刻に展開していく場合があるというのである。

るような子どもたちが、学校に通えなくなつて小児科の門をたたいてきた事例などを紹介しているが、こうした事例はいずれも、大人たちの要求に過剰に適応しようとした子どもたちが、背伸びをしすぎて自分を見失つてしまふ点に原因があるのである。そして問題が深刻なのは、こうした子どもたちの問題が、一種の心身症のような症状として表面化してくる点にあるのだが、実はこうした症状を訴えてくる子どもたちが、最近急速に増加しているのだという。

また同様の問題を『週刊朝日』（一九九八年三月二十日）は、「子どもの心身症が日本をほろぼす」と題して特集しているが、この中ではこうした心身症といわれる症状が最近では乳幼児にまで拡大しつつある現実を問題にし、その原因の一つが、いま乳幼児の間で広がっている「早期教育」なのだと分析している。たとえば、この点に関する慶應大学医学部小児科の松尾武さんに対するインタビュー記事の内容は、以下のとおりである。

たとえば小児科医の三好邦雄さんは、『失速するよい子たち』（主婦の友社）という本の中で、「両親、祖父母に囲まれ、宝物のように育つた」子どもや、母親をして「この子は幼稚園の時に天才でした」と語らせ

「見るものすべてが揺れて見える」と訴えた四歳の女の子は週に五日、早期教育に通っていた。松尾教授の指導で全部休ませたところ、二週間で全快。元気意外であそぶようになったというが、松尾教授の悩みは深刻だ。

『なぜいけないんですか』『みんなに遅れるから』『本人は楽しんでやっている』と指導に従わない母親が多い。でも、子供は親が何を考えているかには敏感なんです。親がそうすれば喜ぶと知っているから、けなげに親に合わせてやる。納得のいかない母親には一度と来院しない人もいます。こんな状況だと十年後には小児科外来患者の子供たちの半分が心身症や神経症ということも十分ありうる話なんです」。

小児科外来患者の半分が心身症や神経症になるとは、いささかオーバーな表現という感じかもしれないでも

ないが、それにしてもここに描かれた親子の姿は、たしかに今や日本中どこに行つても会うことのできる、ごく普通の親子の姿にほかならない。

人間に育つプロセスを、意図的に創出する実践を

一方に、「子どもの自主性に任せます」と言いながら、実は放置・放任に近い形の子育てをする親がいて、そしてもう一方には、「子どもの人生は私が決め得のいかない母親には一度と来院しない人もいます。こんな状況だと十年後には小児科外来患者の子供たちの半分が心身症や神経症ということも十分ありうる話なんです」。

おそれなく問題は、こんな感じで進みつつあるのだろう。そしてこのようにみてくると、子どものなかに生



じて いる諸々の問題は、実は大人自身の問題にほかならないという事実に、私たちは改めて気がつかないわけにはいかないのである。

教えるとは、ともに未来を語ること

学ぶとは、誠実を胸にきざむこと

かつてルイ・アラゴンが詩のなかで語った言葉だが、いま私たちは、目の前の子どもたちに対して、いつたいどのような未来を語ろうとしているのだろうか。あるいは、人間として生きることの誠実さを、子どもたちの小さな胸にどのように刻み込もうとしているのだろうか。まさにそのことが問われているのだが、現実はどうも私たち大人の側が、子どもたちと共にすべき未来を見失い、彼らと語るべき誠実さを忘れだ所で、子育てというたいせつな営みを展開しているように、私には思えてならないのである。

いや問題は、もつと深刻な形で展開しつつあると言

う方が正確かもしね。つまり、「未来」とか「誠実さ」とかいったレベルの問題というよりむしろ、愛されることの心地好さそのものを実感できないまま「自分でくり」の道程を歩まされている子どもたちが増加しているというのが現実なのである。

たとえば先に紹介した稻城市の「一年担任会」の教師たちは、あの「荒れた」子どもとの間でいろいろと試行錯誤したあげく、最も効果をあげた対処法は、子どもを抱っこしたり、おんぶしたりすることだったという。

小学生になつて、と思うだろうが、「みんなだからしてあげるよ」と声を掛けると、子供たちがわっと押し寄せてくる。問題行動を起こした子どもと向かって注意をしても、ふいと横を向いてしまうが、おんぶしながら話すと素直に応じてくれる。今の子供たちはスキンシップを伴つた愛情を家庭で十分に受けていないのではないか。

(『日本経済新聞』一九九七年十月八日)

一人の教師はこのよう語っている。もちろん問題

私は考えている。

を、子どもたちが「スキンシップを伴った愛情」を受けているか否かといった点のみに焦点化するわけにはいかない。むしろ問題は、親を含めて大人に愛されることの心地好さを実感できない子どもたちが、自我を主張する自分自身と、他者との関係をうまく調節できなまま、「いらだち」のようなものを増幅させながら生きさせられている点に存在していると考えるべきなのだろう。

しかしながらそれでも子どもたちは、どうしてこれほどまでに、自分が「自分らしく」生きることに困難を感じなければならないのだろう。そして親たちは、どうしてこんなにも子育てという営みを、困だと感じなければいけないのだろう。

しかしながら同時に私たちは、この仕事がこの時代を生きる「希望」を紡ぎ出していくことも知っている。そしてそうだからこそ目の前の子どもたちとの間に、「自分らしさ」が響きあう実践を創り出していく努力を、今日もまた繰り返していくのである。

もちろん問題を単純に語ることはできないし、それを脱出するための明確な処方箋が存在しているわけでもない。が、おそらくこの困難な現実から脱出する出口そのものは、意外とスッキリしたものなのだろうと

(山梨大学)

▼何を見ているのか。2階から庭がよく見える。



▼庭に水をまいた。地面の色合いが変わって不思議。





▼園長先生が庭の木の葉を切っている。早速遊びの道具になる。



小さなもののきらめき

幼稚園にはメインとなる遊具や保育室の道具以外に、無駄に見えるちょっとした空間がある。また、普段気にも止めない所が、天気やちょっとしたはずみで、変わって見えてくる。子どもは、隅や地面にあるものに惹かれるようだ。背が低いからなのか、視線が下に向かうことが多い。細かいところまでよく見ている。小さな所、小さな物、それは子どもと共に鳴する世界の入口のようだ。至る所にあり、いつでも子どもを招いている。小さいものとは、世界の断片なのかもしれない。断片がいくらでもあることが幼児の空間の豊かさなのだろう。

写真・樋口早百合 解説・無藤 隆 協力・目白幼稚園

幼稚園の日々 ◇◇

▼物置のそばは絶好の虫探しのポイントだ。



▼砂で作ったお団子をタイヤの陰に隠す。何に見立てているのか。



砂の中に手をかくす

津守 真

毛布をかぶる

前二号、「遠くを眺める」「水をあふれさせる」で述べたM郎は、次第に、好きなところに歩いて行き、好きなことをしはじめ、自由感を体験していった。

ある日、この子は、部屋の隅で、毛布を頭からかぶって平たくなっていた。打ちひしがれて、他人から見られたくないという風だった。そして自分の手で顔をほげしく叩き、大声をあげた。私が他の子どもとあざけて笑っていたのが理由らしい。こうい

うとき、この子は自分が悪いことをしたと思うらしい。他人から見えないところに自分をおき、自分を叩いて傷つける。私はそのことに気付いて、この子が悪いのではないうことを知つてもらいたいと思い、子どものそばにいった。この子は毛布の中から手を出して私の手にふれた。このまえ私が紐を結んだのを喜び、帰り際もその紐を欲しがつたことがあったので、私はこの子とたのしむ時をもちたいと考え、また紐を結んだ。この子はそれに手を出した。そして私の手にそっと触れて私を引き寄せた。

半透明のセロハンをかぶる

幾日かの後、この子は、半透明のセロハン紙をかぶってホールを歩いていた。かぶつたまま私と追いかけっこをして遊んだ。毛布をかぶるのではなく、外が見える半透明のセロハン紙であることは、子どもの心に変化が生じていることを示すものであろう。

砂の中に手をかくす

それから数週間後、暮れの寒い日に私はこの子と一緒に商店街のビルの谷間の公園の砂場にいった。子どもは手を砂の中にいれ、その上から白砂をサラサラと落とした。私も白砂を落とすと、この子は砂の中から手を出して手のひらで白砂を受け取つ

た。私の砂を受け取ってくれたことが、私の思いを受けてくれたように思えて、私はこの子の手をこの上なくいとおしく感じた。そして、砂の上からその手に触れ、砂の中に私の手をいれてこの子をまさぐった。子どもは口元を緩め、私の手に触れてきた。手は、身体の一部にとどまらず、子どもにとつては自分自身と言つてよい。一緒に手をふれて遊んだ。

「砂の中に石をかくす」ことについて、以前に私は「保育の体験と思索」(p128)の中で考えたことがある。そのとき、子どもが手に持っていた物を砂に埋めたのは、叱られた場面だった。私に向かって石を投げた子どもに「石をぶつけるとガラスが割れるから投げないで」と私が言つたとき、その子は「割れないもん」と私に石を見せ、一瞬の後に砂場にかけてゆき、砂の中に石を埋めたのだった。「叱られて後ろめたいような気持ちになると、そういう自分を、見えないところにいれてかくす。……他人の目に見えないように、おおいをかけてその下にいれること、すなわち、見えない内部の世界を作るのは、子どもに共通のことである。人の心の内部の秘密の部分といつてもよく、」「このような内側の世界は、明るい外側の世界と比べると、人に見られる」とをはばかる暗さをもつた世界である。この子には叱られる理由は何もなかつた。それにもかかわらず、この子は叱られた自分を後ろめたく思い、かくしたく思つた。

M郎のことを考えたとき、この子はことばが話せない、ときどき大きな声を出すというだけで、他人から拒否される体験を積んでいる。この子にはどうしようもないのだが、自分が悪いのだという風に思っている。そのことがこの子を後ろめたく感じさせ、砂の中に自分の手を埋めてかくしてしまう。「あなたには何も悪いことはない。堂々と明るいところを一緒に生きてゆきましょう」と、大人が子どもに伝え、子どももそれを納得すれば、もはや自分を暗いところに隠すことはないだろう。

私はこの子とできるだけ長い時間こうしていいと思っていた。そして私の思いを、私がいることによつて子どもに伝えたいと思った。一時間半位、公園の砂場で一緒に過ごした。この子が声を上げたとき、私は学校に帰つて弁当を食べようと立ち上がりつた。この子もすぐ立ち上がり、石の縁の上を歩き、ところどころ走りさえして、まっすぐに学校に帰つた。

正月の休みが終わった日、この子の母が笑いながら來た。休み中子どもの調子が良くて、あつと思う間に冬休みが終わりました、あの公園にも数回行つて良く遊びましたと言つた。この子はひとりで校庭の木の茂みの間（哲学の小径と私共は呼んでいた）を歩き、いつたり来たりしていた。一人で教室にはいり、裏庭でブランコに乗つたりして自然に動いていた。



手に白い絵の具を塗る

それから数日後、この子は、地下室に通じる扉に行き、地下にゆきたがった。私は、公園に誘いたかったが、この子はどうしても地下にゆくことを主張した。地下の倉庫に行くと、ポスターカラーの箱から白色の絵の具の瓶を出した。私にあけてくれという。私はここで絵の具を出したら困ると思い、蓋を開けるまねをした。この子は怒った。そして自分で蓋を開けた。自分の手であったところがよかつた。絵の具を指すくい出し、白い絵の具を両手にしっかりと塗つた。そして立ち上がって職員室にいった。砂場で砂に埋めたのもこの手である。黒い絵の具ではなくて白い絵の具をこの子は選んだのもよかつた。私はそのことが嬉しくて、この子の顔をなめ、ふたりでなめっこをさせて笑つた。そうしている間に、私は地下の倉庫に色セロハンがあることを思い出した。彼は地下にそれをとりにいきたかつたのかもしれない。そのことを忘れていた。地下の倉庫にいったら困ると思うと、子どもには理由があるのかもしれないのに、そのことは全く意識に上らない。どうしてだろう。意識というのは、ひとつのことにつぶれると、他のことは隠されてしまうらしい。他の人に頼んで色セロハンを取ってきてもらつた。この子はすぐに半透明のセロハンを顔にかぶつた。そしてまた私とあざけっこをした。シチューができていて、三杯おかわりをした。そして私を離れていった。その後、またシチューを食べたとのことである。

その後、この子は顔に何もかぶらないでひとりで自由にのびのびと走っていた。数カ月後、この子は六年生を卒業した。

小学校の時期を、私はこの子と一緒に過ごして、彼の周囲に対する繊細な心に触れ、自分を主張する強さを見た。そして、ともすると受け入れ難い行動をも表現とみることによって、一段階ずつ次の生活が開かれることを学んだ。このことは障碍をもつ子どもだけのことではない。沢山の子どもたちが、現代の学校と社会の中で悩みを負っている。これは管理と規制の強化によっては決して解決しない。だれかが子どもと一緒に、子どもの表現をよく見て、思いきって子どもの生活をつくるならば、その同じ子どもが学校と社会に貢献することとは疑いない。

仮想世界に出口はあるか

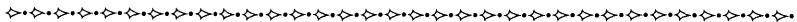
——情報社会のなかでさまである心

山本 政人

十年ほど前からゲームのことばかり考えている。いろいろなことがあるが、一番の関心はやはり発達にどのような影響を及ぼすかということである。しかし未だによくわからない。多くの子どもたちが幼いころからゲームに触れるようになつたことで、何かが変わったのかどうか。十年ぐら

いでは目に見えるような変化はないのかもしれない。

それよりこの十年、ゲームの方が大きく変わつた。今どきこんな目まぐるしく変わるもののはほかにない。家庭用ゲーム機で一世を風靡したファミコンは、九十年代前半にスーパーファミコンに



取つて代わられ、そのスーパーファミコンも、今や全盛の次世代ゲーム機に取つて代わられた。それと同時にソフトにも大きな変化が見られた。最も変わったのは画像である。最初に次世代機の画像を見たとき私は驚いた。こんなに美しく活き活きとしたものになつたかと正直感動した。隔世の感であった。

ただ、ゲームのシステムはそれほど変わっていない。画像や音楽や操作性は格段に進歩したが、革新的なゲームが現れたわけではない。むしろ

『ポケモン』のようなシンプルでオーソドックスなゲームの方が売れたりする。ゲームそのものとしては昔とあまり変わらないようと思う。しかし今のゲームは画像の美しさやリアルさという点で昔のゲームをはるかにしのいでいる。それだけでも進歩だと言える。

ゲーム人口も大幅に増えたはずである。昔は一部の子どもと大人だけだったが、今は子どもはもちろんのこと、若者もいい年をした私のようなおじさんもゲーム機を持つている。毎日するわけで



はないだろうが、休みのときなどにゲームをするという大人はたくさんいるはずである。もしゲームの影響で事件が起きることがあるとすれば大変である。人気のあるゲームは何十万という単位で売れるから、そういうゲームが何か悪い影響を与えるとすると、何十万人の人々が事件を起こすかもしれないといふことでもないことになる。そんなことはないと思うし、そんな風に論じること自体、すでにナンセンスであると思う。かつて紙おむつが出てきたとき、あれはよくないといふことがさかんに言われたが、誰もが使うようになるとそんなことは言われなくなつた。ゲームもこれだけ普及すると、よくないと決めつけてみても意味がない。

大学生に聞いてみると、ほとんどの学生が小学生のころまでにゲームに触れている。なかにはか

なりはまつている者もいる。その点では最近の若い学生の方が話が合う。私と同じ世代の人とゲームの話で盛り上がるとはまずない。某大手ゲームメーカーに勤める友人がいるが、その友人よりも私の方がよほどゲームに詳しい。あたりまえのことかもしれないが、彼は仕事が忙しくてゲームをする気にはならないそうである。

普段は無口でおとなしそうに見える若者が、ゲームのことになると急に目つきが変わり、ゲームについて雄弁に語り出すというのはよくある光景である（実は私もそれに近いのだが、ここはえて「若者」のことにしておく）。ゲームをあまり知らない者の目には、このような若者の姿は異様に映る。いわゆる「おたく」。人との交渉を避け、自分だけの世界に閉じこもる者。何を考えているのかわからない、おとなしそうな外見とは裏

腹に、倒錯した欲望を内に秘めている者。こんなイメージがあるに違いない。

テクノロジーの進歩とそれがもたらした情報化によつて、人と人とのコミュニケーションは広がり、深まるように思えた。しかし実際には逆の事態が起きている。技術の進歩と情報化についていけない者と、それにしっかりついていける者との間には越えがたい溝ができつつある。これは過渡的現象だという意見もあるだろうが、私はそうは思わない。技術革新と情報伝達は想像を絶する勢いで進んでいる。続々と新しい機械が作り出され、使い方を覚えたころにはすでに新しいものが出ている。情報はさらにスピードが速い。ある情報が伝わると、即関連する新情報が出てくる。新しい情報はすぐ古くなる。情報は際限なく発信されている。そして人が持ち得る情報には限りがあ

る。同じ社会で生きていたがら、ひとりひとりが持つてゐる情報には大きなばらつきがある。情報が多すぎて共通のものを持ちにくくなっている。

ゲームの害のなかで特に懸念されているのがコミュニケーションの問題である。いわく、ひとりでゲームばかりしているのでコミュニケーションができない人間になる。確かにそういうことはあるかも知れない。しかし全く別の見方もできる。先ほど述べたように、ゲームのことになると熱く語り出す若者がいる。彼らはコミュニケーションしようという意図を持つていて見える。しかし聞く方がそれを理解できないということがある。これは聞く側に問題があると言うこともできる。そもそもコミュニケーションにおいて、片方だけに問題があるということはあり得ない。ゲームの例で言えば、送り手（ゲーム好きの若者）と

受け手（ゲームを知らない大人）が知識を共有していないのだから、コミュニケーションが成立するはずがない。ひとりでいるからコミュニケーションができなくなるというより、かたよった情報を与えられ、かたよった知識体系を持つてしまうのではないかと思う。

コミュニケーション不全の前に知識のかたよりがあるとは、まるで自閉症の認知障害説のようだが、実は知識のかたよりを是正する最善の方法はコミュニケーションである。コミュニケーションをうまくするには、結局コミュニケーションが大切ということである。問題はかたよった情報化を教えてしまうメディアにある。こちらの方はとてもなく大きな問題である。とても私の思慮の及ぶところではないが、現在の状況が続く限

り、世代間のギャップはますます広がり、コミュニケーションがむずかしくなり、人が人を理解できないという事態が進んでいくような気がする、と言うとあまりに悲観的だろうか。

大切なのはコミュニケーションしようとする意志、理解し合おうとする姿勢である。実は情報化がそれをむずかしくしているのかもしれない。人は単なる情報のやりとりがコミュニケーションであると思ってしまい、コミュニケーションの前提となる理解し合おうとする姿勢を持てなくなりつあるように思える。



最近、発達心理学において「心の理論」という概念が話題になっている。「心の理論」とは、他者的心についての理論（表象）であり、コミュニケーションが成立するための必要条件である。自閉症的人にはこれがないため、コミュニケーションができないとも言われている。最初、この話を聞いて、なぜこんなあたりまえのようなことが話題になるのか不思議に思った。しかし話を聞いているうちに考え方があつた。人はなぜ他者に心があるかと思えるのか。普段あたりまえのことのようにならざるを得ない。心が他者のなかにあるという「知識」を人はいつどのように獲得するのか。あるいはそれは生得的なものなのか。また、知識であるとすると、それは変容する可能性があり、他者に心があると思えなくなることもあり得るのか。

人間が他者を自分と同じ人間であると認識できるかどうかは、他者が人間であるという信念の有無によって決まるところにある。哲学者が言っていた。信念は知識とは多少違うが、やはりそれがいつどのように生まれるのかが重要な問題である。それが生得的なものであるというのはどうも根拠に乏しい。やはり社会のなかで発達すると思いたいところである。

私はゲームによってコミュニケーション不全になるとか、人間関係が希薄になるとは思わない。今日言われているそれらの問題は、別にゲームだけではなく、情報化という社会全体の変化によって出てきたことのように思う。子どもや若者たちは、ゲームという一見狭そうで、実はとてもなく広大な世界のなかでコミュニケーションを求めている。その世界は昔風に言えば「おとぎの

国」。今風の言い方をすれば「仮想世界」である。この世界には誰でもが入れるわけではない。「好奇心」や「遊び心」を持っていて、その上新しいテクノロジーを使いこなせる者でないと入っていけない。その世界を理解しようとする姿勢を持つたない者は、そこに足を踏み入れることすらできない。

一方、そこに踏み込んだ者は、『神曲』のダンテのように、広大な世界をさまようことになる。

出口は見つからない。道に迷って深みへと降りていいくこともあるれば、高みへ昇っていくこともあるだろう。同伴者もいないし、道案内もない世界である。彼らには同伴者が案内人が必要かもしれない。それはこの世界のことをよく知り、彼らを理解できる者でなければならない。

前に『ポケモン』について書いた。事件となつ

たテレビ放送は、主人公のサトシたちが「電腦空間（サイバー・スペース）」に迷い込んでそこから脱出する話だった。最後の脱出のところで放送を見ていた子どもたちが倒れた。私には象徴的な出来事に思えてならない。文明の発達によって作り出された新しい世界。そのなかに迷い込んでしまった子どもや若者たち。そこから抜け出そうとしても、出口は見つからないのである。誰も彼らを導く術を知らない。

（お茶の水女子大学）



❀❀❀ ある日の育児日記から ❀❀❀

(91)

佐藤 和代

ある日曜日、仕事で一日留守にしました。子どもたちにとっては久しぶりの「母のいない休日」。何をしたかな?と思いつながら帰ってくると…

「きょう、ぼく、カメラマンした」と有。「圭も

ね、カメラ持つて、公園行つたよ。」ははあ、写

真を撮るのが好きな敬(お父さんです)が二人をつきあわせたな。どんな写真ができたやう。

さて数日後、あがつてきた写真を見てびっくり。風景の写真だとばかり思っていたら、有の作品はロボットやら基地やら、お気に入りおもちゃの大写しばかり。じていねいにもテーブルにふる

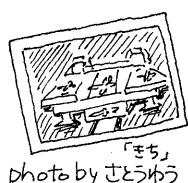
しきやスカーフをかけ、おもちゃを置いて、低いアングルで接写しています。「公園のあと、おうちでもカメラマンした」

そうです。うーん、これはまるでテレビの特撮か子供雑誌のグラビアだわ。

日曜日に行つたのは、都内でも有数の自然豊かな公園。なのにわざわざこんな…と思いつつ、有が「こういうの撮りたい」と言うのを聞いて、いそいそぶろしきなど持ってきてやつている敬の姿

が思い浮かぶと、ほほえましい気もします。一人で「男の子の世界」してたのね。ちなみに圭の写真は…

フィルムを巻き戻す前にまたを開けたとかで全部真つ黒。残念でした。



都心生まれの大正時代

塚本 福



うちの仕事

私は、大正二年十一月二十五日、東京市麹町区有楽町二丁目二番地にあつた自宅で生まれました。今年で八十四歳になります。今のJR山手線有楽町駅の一一番はずれ、新橋駅寄り改札口の日比谷側出口のすぐ前で、「小川生美堂」という名の看板屋でし

た。もちろん、小さな看板の注文が多かったのですが、時々は大きな仕事として、日本橋高島屋デパートのショーウィンドウや、正面吹き抜け階段の飾り付けも手掛けていました。帝国劇場の舞台装置もしだことがあつてうちが作ったというカチューシャの舞台を見たことがあります。

父親のほかに、上野の美術学校（今の東京芸術大

学美術学部) を出た父の弟(千歳)が腕達者で、その他住み込みの店員一名、通い二名がいて、計五人で仕事をしていました。

両親ときょううだい

両親は、小川経次郎・たまといいます。小さい頃は、〈おとつあん〉〈おつかさん〉と呼んでいました。おとつあんは相州(今の神奈川県)浦賀の造船所の職人でした。大きくて男らしく、当時の花形役者「菊五郎」に似ているとかで、よく人が見にきたと母が自慢していました。

おっかさんは日本橋兜町の株屋の娘で、「半鐘どろぼう」と言われたほど背の高い人です。むろん父が年上で、十五歳も違う二人でしたが、喧嘩したのを見たことがありません。とても仲の良い夫婦でした。

父は母のことを物凄く大切にしていましたから、母はとても幸せだったと思います。例えば、朝は、

みんな父が子供たちに御飯を食べさせ、女の子全員の髪を父が結ってくれました。今考えると、父はとても協力的で、家庭的で、本当に現代的な人のように思われます。父は、いつも母のこと「山の神、山の神」と呼んでいましたから、私はずっとそれが母の本名なのだと思いこんでいました。母は父が帰宅するのを玄関で待っていて、パチンと一人で手を合わせては出かけました。一人で歌舞伎座を見に行っていたのです。夕飯の世話は父と姉がしました。私が歌舞伎好きになったのは、母の話のせいだと思います。

この夫婦から、九人も子どもが産まれました。一番上と一番下が男で、あとは女ばかり七人。私は、戸籍の上では五女になっていますが、実際は姉に当る二人が赤ん坊のとき「くなつていたので、三女として育てられました。ちょうど真ん中の子だったのです。友だちからは「まんなかまぐそ」とからかわれたのです。

父は母のことを物凄く大切にしていましたから、母はとても幸せだったと思います。例えば、朝は、

私は、「福」という名を貰いました。男の子みたいに元気で、「おへちや」でした。両親は、とても可愛がってくれました。数え七つのお祝いのときは、チリメンのきれいな長いたもの着物を着て、家の前から人力車で父の膝の上に乗り、赤坂山王の日枝神社にお参りしたことが大変嬉しくて、今でも忘れることが出来ません。ほかに、神社の祭りなどへ行つたことはありません。近所に八幡様など無かつたですからね。銀座も近かつたのですが、遊びに行つた記憶はありません。遊び相手は、家の中にたくさん居ましたから。

女の子の中では、一番上の姉が一番美人でした。

数えはたちの年に、新聞広告の花嫁募集に面白半分

応募したところ、たしまち気に入られ、さらわれるようになつてしましました。しかしその後は、あまり幸せでなかつたと聞いています。

私の後に二人の妹が生まれ、そのあと大正十二年の夏に、私とは十歳違いの弟が生まれました。その

年のお正月に、日枝神社から矢を二本戴いて生まれたので、「矢二郎」と名付けられました。矢二郎が生まれた時の父の喜びようといつたらなかつたですね。何しろ、女の子ばかり七人も続いた後だったのでから。

お引っ越し

引っ越す前の家からは、日比谷公園の門がよく見えました。その公園を通つて一年間だけ日比谷小学校へ通いました。五六歳の頃、つまらなくなると有楽町の駅の改札口へ行き、日が暮れるまで、降りするお客様をぼんやり見ていたことを思い出します。



す。今と比べたら、お客様の数はとても少なく、電車の数も三台連結ぐらいではなかつたでしようか。

大正十一年、私が小学二年生のときに、淀橋区諏訪町に家を買ってそこへ引っ越しました。山手線高田馬場駅の近くで、練兵場だった戸山カ原のそばです。子沢山で住みにくかつたから、広い家に変わつたんだと思います。もっとも工場や店は、元のままでした。

本当の買主は千歳叔父です。叔父は美校在学中に帝展（今の日展）に入選したことがあるほど上手な絵画好きで、本当は画家として一人立ちしたかったようですが、家族を食べさせるために泣く泣く看板屋になつた人です。しかし、画家との交際は続けてい

て、仲間の一人から、植木置場があつた二〇〇坪の土地の上に建ててある二階屋を三〇〇円で買い、家族がそこへ越したのです。アトリエも付いていましたが、土地は借地でした。

私は、戸塚第二小学校の二年生に編入しました。

関東大震災

私が三年生の九月、関東大震災が起りました。庭で遊んでいると、ゴーッという凄い音がして大地が揺れ出したので、慌てて家中へ飛び込みました。その後、屋根から瓦がばらばら落ち出しました。母がすがりつく子ども全員を抱えて、「死んだ

らみんな一緒だよ」と何度も繰り返しました。揺れがすこし収まったところで屋根瓦を越えて外へ飛び出し、庭の石にかじりついていました。振り返しが何度も来るものですから、何日かは外で蚊帳を釣つて寝たものでした。しかし、幸いなことに家は倒れず、火事にも遭いませんでした。

だが有楽町の工場のほうは、つぶれて焼けてしまいました。困ったことに、あの辺も、下町全部も焼け野原になってしまいましてから、看板の注文がさっぱり来なくなってしまったのです。

仕方ないので、隣人のつてで「タバコ屋」と「おせんべい屋」を始めたところ、みんな食べ物には飢えていたんでしょうが、とてもよく売れて成功したそうです。

女学校へ

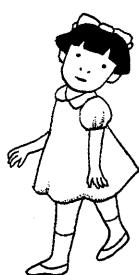
五年生になってから、担任の先生が特別に補習授業をして下さって、そのおかげで東京府立第五高等

女学校（今の都立富士高校）に合格できました。同じ学校から幾人受けたか分かりませんが、合格したのは三人だけだったので、とても誉められました。

他の友だちは、川村とか淑徳とかいった私立の女学校へ行くか、小学校の高等科へ進みました。

私は、山手線で新宿駅まで乗り、そこから歩いて歌舞伎町にあった女学校へ通いました。木造でしたが大きくて立派で、しゃれた本館のほか、平和館や記念館もありました。それが大正の最後、十五年春のことでした。

一年生の夏、水泳訓練の合宿がありました。学校の寮がある沼津の千本松原へ行つたのです。皇室の



御用邸のすぐ近くだったと思ひます。海岸に並んで、先生がまず平泳ぎの型を教えて下さいました。その格好をしながら海に入つたら、すぐに浮いて泳げたのです。子どもたちは、「嘘だ」といって信じないのでですが、本当のことです。顔を水に付けないから、恐くなかったのでしょうかね。

四年生になつたとき、父親が倒れて入院しました。胃癌だったようで、まる一年間も病院暮らしでした。その間母はずつと付き添つていて、一日も帰宅したことありません。当時まだ十八だった二番目の姉が、母に代わつて家中全部のきりもりをやつてくれたのですが、たいしたものでした。父は最後に自宅に戻り、三日目に亡くなりました。六十三歳でした。

私は本当は、昭和六年に卒業するはずでした。ところが、弓道部で弓を引くのに夢中になり過ぎ、よくかいた汗の始末が悪かつたためか肋膜にかかり、五年生の一年間休学してしまいました。お友だちが

よく見舞いに来ててくれて、私の寝床の回りに制服のまま寝そべつておしゃべりしました。皆は、「家ではやかましくて、こんなこと出来ないけれど、あんたの家は自由でいいわね」と言つてくれました。休学のため修学旅行へも行けず、残念なことをしたのですが、翌年には治つて次の学年の五年に復学し、昭和七年に卒業しました。先生が同情して下さつて、私には前の学年と後の学年と二種類の卒業アルバムを下さつたので、今でも大切にして持つているのです。

お陰様で友だちが二倍に増え、卒業後の付き合いも幅広くなつて、とても得しました。今となつては、休学もいいもんだなあと思つています。

(以上、塚本福が語つたものを、湯沢雍彦が聞き取つて整理したもの。塚本福は元東京家庭裁判所務官で、湯沢雍彦の義母にあたる)

夢の日々(六)

次の「夢の日々」へ出発

大多和 檀



一月に、神奈川県の研修会で津守真先生のお話をうかがう機会がありました。

「子どもは毎日何かを探しているのです。ですから、子どもの遊びは何かを探究していることで、これは時間がかかる営みです。幼稚園は何をするところかというと、一人一人、

充分に探究させてあげるところです。自分が選択し取り組んだことが、小さな集団の中でみんなのものとして展開していく。みんなの中で価値が認められる。そのように探究していた毎日が、かつてあつたということが、どれだけそのあとの人生にとつて大事なことで

しょう。

そうだったのだ。神明幼稚園での保育は、少人数に助けられ、私自身も含めて、充分に探究する時間があり、場の広がりがあり、しかも、ふみちゃん、せいちゃん、さおちゃんがそれぞれのペースで、自分の生活と三人合わせた生活との間を行ったり来たりしていたから、今でもその日々を思い出すと、私の中では「夢の日々」となるのだと……。

今、私は、一転して多人数の園の園長となり、三年が過ぎました。

▼年少と一緒に代々木公園の椿の下で

この場所 자체が陽のよく当たる夢のような所でした。そんな幼稚園時代最後の遠足での写真です。私の右側が「加藤八郎校長園長先生」です。



何かを探究するのに、これ程素晴らしい環境はないと思える環境があります。

三年前は平らだった砂場もようやくデコボコ、してきました。庭の柿の実やざくろの実も一緒にとつて食べられるようになりました。

朝、園庭内のゴミひろいをしていると——門のない幼稚園なのです。子どもが出ていきませんか、と心配されますが、保育時間中に出ていった子どもはいません。「門」があると「入る」という思いがあり、だから「出る」という行動が生じるのかなと思い始めていますが、いかがなものでしょう——あちこちで、かくしてある泥ダンゴにも出会えるようになりました。これらのこととは、時間がが子どもたちのものになってきた表われと思っています。そして私もようやく、「六つになつた」というA・A・ミルンの詩、

一つのときは、

なにもかもはじめてだつた。

二つのときは、

ぼくはまるつきりしんまいだつた。

三つのときは、

ぼくはやつとぼくになつた。

(このあと、四つのときは、五つのときはには、今は六つで、と続きます)

という「三つのとき」になった心境です。

三年たつてやつと私は私になり、これからはまこと幼稚園で「夢の日々」を作つていきたい、という「夢」を持ち始めています。

先の講演会で津守先生は次のようなことも話されました。

「幼稚園は現場です。現場は毎日違う。きのうまでの続きもあるが、又、今日は新たな出発、一日の始まり。何かあるし何かやれるかもしれない。そう思うと熱い血潮がみなぎる思いがする」。

このお話にどれほど私の血潮がみなぎったか……。

そうなのです、私はあきっぽい性格なのに、なぜか幼稚園の先生だけは三十年も続けています。それは幼稚園は毎日新しいことに出会うところで、園長になってからはますます子どもと同じ探究の日々だし、現場だからなんだと。

私立幼稚園は「経営」という面も考えなければいけません。そこを考えるとめげそうに

なり、私の血潮もみなぎらなくなってしまいますが、

「混とんとしている中で、『こうしよう』という心が生まれてくるのです。それが自発性です」

とおっしゃった津守先生のことばを支えに、そして今現に職員とお母様とが力を合わせて「こうしましょう」という心が生まれてきて、いることを三年間の誇りとして、次の夢の日々へ出発です。

—— 終 ——
(まこと幼稚園)

今、大切にしたいこと

尾形 節子

最近保育学界隈では「実践即研究」とか「実践的研究者」とかいった言葉が呼ばれているように思われますが、これって、「言うは易し、行うは難し」の典型という感じです。今の私にとって、実のところ「実践」だけでも「研究」だけでも荷が重くて耐え難いくせに、理想としては「実践的研究者」などと感じて、自分自身を整理しようと、二年間の研修を利用し

て、いわゆる学際的研究に取り組みました。そこで多くのことを学んだのですが、どうしても学際的研究の土台に乗りにくかった、私自身の気持ちの動き・感じたことなどをやはり大切にしたく、そんな思いで、『家庭と幼稚園のコミュニケーションの充実』、『保護者と保育者のコミュニケーションの充実』ということに閑して、何かご提案がありましたら、お知らせく

ださー」

という自由記述回答欄に寄せられた意見を引用しながら、「今、大切にしたいこと」を書いていきたいと思います。とにかく雑多な日常の中の自分自身をどうにかして整理することで、せめて「実践的研究者」としての基盤としたいと考えたからです。いろいろな意見があり、その一つ一つに、本当に考えさせられました
が、一番心に響いたものをまず引用したいと思います。

☆子供に合わせるだけじゃなく、わるいところはなおして、いいところはほめて下さい。家族とか親に関係なく子供だけを見てほしいです。 (D 幼稚園保護者)

これは、論文においては類型化しきれず「その他」としたもので。でも、いろいろな保護者の方が、いともではないにしろ、ちらっと頭をかすめることのようになに思われ、心に残りました。保育者と保護者の重点

のおき方は、子どもたちとのちょっとしたかかわりでささも、いつも一致しているとは限りません。もちろん、一致していることは是非についてだつて、そのまま、状況に応じて変わります。また、たとえ言葉にすると同じでも、実際に行われることは全く違つて見えることもあります。一人の子どもの「わるいところ」や「いいところ」のとらえ方、「なおし」方や「ほめ」方は、人によつて違いますが、そのおおもとの願いは一緒だつたりすることもあります。「子ども現状に則す」こと、「子どもにあわせる」こと、「子どもにながされること」などは同じように見えることがあります、何かがちょっとずつ違います。子どもを育て、ともに育つにあたつて、今、コミュニケーションという切り口がとても大切なことのように思われるのです。

たとえば、私の勤めている幼稚園では、保育者と保護者は子どもの送り迎えを介してほぼ毎日会うわけ

ですが、それぞれの感じていることについてじっくり話し合う時間的ゆとりを、私はなかなか作れませんで

す。
(B 幼稚園保護者)

した。それでも、「ともに育て、育ちあっていくことは、幼稚園にかかわっている者の大きな願いであり、それを実践という形にしていくことの意義を感じないことはありません。それは、非常に個人的な思いなのでしょうか。そういえば、質問紙調査をしようと

思ったそもそもその動機はそれだったようと思われます。そこで、自分の感じたままに自由記述回答を並べてみようと思います。

☆一学級の幼児数が増えてくると、やはり、保護者とのコミュニケーションを取る時間が限られてしまうことが多く、一人一人の良さを伝えることが制限されてしまう。近年、保護者側も子育てに不安が大きく、保育者と一対一の関係をとりたがる傾向があり、相談の時間も制限されてしまうことが多い。国全体が、

結構いろんな人がコミュニケーションを必要と感じているんだ

☆いろいろな悩みを相談でき、プライバシーも守つてくれる人が、幼稚園か近くにいてくれたら、と思います。母親の精神状態がよくないと、子どもも不幸です。自分で、なんとかできる時はよいのですが、そう

り、時間が必要。

(C 幼稚園保育者)

☆先生方とは、何かと相談にのって頂いたり、お声を

掛けて頂いております。子どもの園での様子は、なか

なか知れませんので、つまずいている時はすぐに、先

生方とお話をすることにしています。そのことによつて、先生方も、子供のサインに気づいて下さったりして、子供の気持ちを聞いて不安を取りのぞいて下さっています。ただ、問題をおこす相手の子供には、

(親)には、何も言つていません。つい、二年間のつきあいもあると思うと、がまんしますが、その分気が重く、親同士のコミュニケーションを充実させようと、いう気には、なりません。むづかしいです。

(A 幼稚園保護者)

どんなコミュニケーションが

必要とされているのかな

☆保護者に対し一方的な感覚を話してゐる様に思う。私の意見も尊重しようとする姿が見えないし物事を真剣に対応する人間性豊かなところに欠けていると思いま

す。事なかれ主義なようにみうけられます。

(D 幼稚園保護者)

☆実際問題があつても、幼稚園(保育者)に相談する前に友だちに相談して、幼稚園の方にはあまり話をした事がありません。

(A 幼稚園保護者)

☆園内での子供の様子は全くわかりません。うるさがられそうで、あまり聞き出すこともしていません。

時々先生から今日こんなことがありましたと聞く程度です。知り合いの通う保育園では、参観日を特に決めないで、好きな時に自由に参観できるということです。本当のところ、もっと園内の情報を知りたいで



す。参観日の畏った様子ではなく、普段の子供達を見たいです。

(B 幼稚園保護者)

☆保護者と保育者のコミュニケーションがある程度できていると家庭と幼稚園のコミュニケーションも円滑にいくと思う。お互いが歩みより子供の成長を考え、人間性も培われるようになると幼児が、それぞれに大きく成長すると思います。「根」の部分をしっかりと育てれば良いと思います。

(E 幼稚園保護者)

☆家庭にしかできないこと、幼稚園でしかできないことがそれであると思うのでコミュニケーションを充実することは必要だと考える。又、保護者の考え方と保育者の考えが違うと子供もまよってしまうのでそんてん充分コミュニケーションをとつておべきだ。

(C 幼稚園保護者)

どんな工夫をしているのかな

☆保育者はまず保護者の気持ち、話を聞く姿勢をもつ

ように努力している。

(A 幼稚園保育者)

☆保護者とのコミュニケーションをとる時に、保育者としての自分の思いをのべたり、伝えることばかりをしてしまったりするけれど、まず、保護者の思いに耳をかたむけることのできる保育者になることが大事とおもいます。しゃべり上手より聞き上手と思います。

(S 幼稚園保育者)

☆保育後、園庭に出て顔を見せるようにし、保護者からの応答に応じられる時間をとるようにしている。

(N 幼稚園保育者)

☆「さようなら」をした後、園庭で子供達が遊んでいる間に先生とよく話をします。園庭開放のおかげで、担任の先生や教頭先生と“立ち話”の中で良いコミュニケーションがとれていると思います。

(B 幼稚園保育者)

☆互いに責任を追及し合う関係でなく、社会の子供を親と園が両方から育てていこうとする協力関係にある

「ことを伝えていく」ことが大事だと思う。

(W 幼稚園保育者)

☆先生である前に人であることを持つことが大切であると思う。一

者の方も思いやりを持つことが大切であると思う。

個人間として尊重される意識がお互いのコミュニケーション

ケーションを円滑にするのだと思う。

(H 幼稚園保護者)

いろいろな人が、いろいろなことを考えて、幼稚園で生活をしている。幼稚園で生活をする人々の同じところ、違うところ、さまざまな側面が、その生活を広げたり深めたりできたらいいな、と思いました。それの方の工夫に学びながら、今現在この幼稚園での私たちにとっての意味を問い合わせし、それを具体化していく意識や努力をしていきたいと思いました。保護者と保育者の、親と子どもの、先生と子どもの、保育者同士の、親同士の、子ども同士の……いろいろなコミュニケーションが一方向ではなく、双方向にとれるような幼稚園での生活を大切にしていきたいと思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

*これは、一九九七年九月に「子育て状況における家庭と教育現場とのコミュニケーションの構造—幼稚園教育について—」という研究テーマで実施した質問紙調査へ対象・東京都の公立幼稚園九園の保護者四九五名、同じく三六園の保育者一〇四名／において、その全協力者五九九名中一四七名（二五%）の方々が回答へ保育者協力者四九五名中一二六名（二六%）が回答、保育者協力者一〇四名中二一名（二〇%）が回答／を寄せてくださいました自由記述回答です。



子どもの本から

本に願いをこめて

皆川 美恵子

『ヘンショーさんへの手紙』は、一人の男の子の手紙と日記だけで（もちろん虚構ですが）構成されている、斬新な手法による児童読み物です。アメリカ書くことから日記を書き出し、自分の世界を作り上げてゆく子どもの成長ぶりが、文章によつて浮き出されているのが魅力的です。

この読書指導の背景も窺え、教育実践の面からも興味深い作品です。しかし何といっても、読書をキッカケとして子どもが作者へ手紙を書く、やがて手紙を

かつたです。みんな、さうに気にいりました」と伝えます。三年生になると、自分一人で読んだことをヘンショーさんに知らせます。

四年生の読書週間には、愛読書となつたヘンショーさんの本の中身を立体模型のジオラマに仕立てます。すると先生は、作家に手紙を書くようにと

指導し、リーは手紙を書いて今度は自筆の返事をもらいたいと伝えます。五年生のリーは、読書感想文を書き、Aマイナスの成績をもつたこと、そして他の作品も読み出したことヘンショーさんに知らせてています。

ところで六年生になると、両親が離婚し、リーは母親と共に引越をして転校します。新しい学校でも先生は、作家に手紙を書いて、作家についてのレポートを書くようにと課題を出しています。



ヘンショーさんへの手紙

B・クリアリー作 谷口由美子訳 むかいながまさ絵

▲「へんしょーさんへの手紙」

B・クリアリー作 谷口由美子訳

むかいながまさ絵 あかね書房 一九八四年

けの手紙を送つてくる子どもたちを食べてしまう、「むらさき色の怪物」と答え、指導の先生の顔色を変えさせています。さらには、リーに対しても、今度はヘンショーさんから十の質問が寄せられます。

①きみはだれか？ ②きみの見かけはどうか？

③きみの家族は？ ④住んでいるところは？

⑤ペットを飼っているか？ ⑥学校は好きか？

⑦友だちはいるか？ ⑧好きな先生は？

⑨きみをなやませているのは？ ⑩望むことは？

ヒゲを生やし、アラスカに住む若い男性という児童文学作家ヘンショーさんは、父親と別れてさびしく暮らすリーザーの心の世界に、このように手紙を通じて深く入り込んできます。長距離輸送の大型トラック運転手をしている父親は、電話をくれるという約束も守ってはくれません。手紙に対して律儀に返事をくれたヘンショーさんへ、質問に答えるリーザーは、一生懸命、自分は何物か考えてゆきます。両親の離婚の真相は何であったのかも、手紙を書くことによって見つめゆくことになります。

やがてヘンショーさんにすすめられるまま、リーザーは日記を書き始めます。文草が何も思い浮かばない

リーザーは、ヘンショーさんに宛てて手紙を書くつもり

として、一日の出来事を日記に書き留めます。こうしてリーザーは、学校の文集に投稿した作文『父のトラックに乗った日』が、特別賞に選ばれるまでに書く力や、自分の内面を見つめ表現する力が養われてゆきます。

ところで、この本の作者ベバリー・クリアリーゼは、ヘンリー君と犬のアーバラーとの出会いを描いた『がんばれヘンリーくん』（一九五〇年刊）をはじめ、ヘンリーくんシリーズで人気を博した一九一六年生れの有名な女性児童文学作家です。ユーモアのセンスに溢れる両親のもとで、屈託なくのびやかに育つヘンリー君は、当時のアメリカの理想とする家庭の、理想の子ども像でした。しかし本作品（一九八三年刊）は、崩壊家庭の子どもリーザーを主人公としています。

リーザーは母親に、なぜ離婚したかを尋ねると、母親は自分の生き立ち、父との出会いと恋愛、トラック

での移動生活を語り、結婚が早すぎたこと、父は歳月を重ねても全く成長しなかったことを説明します。父親に対し、ひとつひとつ思いあたるリーです。が、それでも大きなトラックの高い運転台に父親の隣りに坐り、ブドウを積んで高速道路を走った思い出を作文に書くことからわかるように、父を大切に慕い続けています。

リーはヘンショーさんには、一度も会ったことはありません。しかし、本をめぐっての手紙のやりとりを通じて、ヘンショーさんは実際の父親以上にリーをしつかりと受けとめ、リーの心を揺さ振り、励まし勇気づけ、リーをさらなる高みへと導いています。まるであのヘンリー君が、ヘンショーさんとリーオの名前におさまっているかのように、二人は理想的な大人の作者と、子どもの読者として配置されています。

童図書週間を一九一九年から始めて七十五周年を迎えた年、七十五年間の七十五点のポスターを集めて記念出版しました（邦訳『本に願いを』B.L.出版）。絵本画家が絵筆をふるつて本への願いをこめたポスターは、大人と子どもが織りなしてきた美しい歎びの歴史をも伝えています。

本作品も、長年子どもの本を書き、子どもたちに贈り続けてきたクリアリーが、読書がいかに人間の心を癒し、心の糧になるか、本にこめた願いを語っています。作家が本を通じ、子どもとしつかりつながることを祈つてやまない、クリアリーの夢みる祈りのかたちが、そのまま本となつた珠玉の力作です。

（舞々同人）

編集後記

が形をなしていく過程です。この中で、打楽器を中心とした老人オーケストラもできました。

氏は、障害を持ったお年寄りがそ

のため日々活動作がままならな

くとも、"生命または生活の質"が

高まることを求めています。

この実践のきっかけは『遊び心』

にあつた、とあります。読んでいる

と、先んじて"弾く人"となつた氏

の姿が、治療チームのスタッフ・地

域性を考えた打楽器のオリジナル曲

を作つた作曲家などの他領域の専門

家・当のお年寄りなどの『遊び心』

を次々にめざぶり、多くの人たちを

巻き込んでいった過程が浮かび上

がってきます。

この記事を読んでいたときに、『音楽療法』(河合眞著、南山堂)と いう本を手にしました。老人病院でのこの実践は、医療という枠組みの中に、一精神科医である河合氏自ら ヴァイオリンを持ち込んで試行錯誤しながら、氏の考える"音楽療法"。

* *

ここにも、探究することで充実した日々を送つた人たちがいる、と思いまして。

(A)

幼児の教育

第九十七卷 第七号

定価五五〇円(本体五四〇円)

発行 平成十年七月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二十一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三一五三九五ー六六一三(営業)

☎〇三一五三九五ー六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一ニ一九六四〇

☆ 本誌の購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの「なぜ」に答える〈全4巻〉

藤田千枝 監修
セット定価：本体9,200円+税

〈最新刊〉

子どもの好奇心は宇宙をものみこむほど広く大きく、大人は鋭い質問にたじたじする経験もさせられます。この好奇心をうけとめ、しっかりのはす手助けをしたいと願って生まれた、自然と科学の遊びシリーズ。

1. 科学のふしき①

坂口美佳子・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



水、波、風、石、そして太陽の光など、
自然現象のなかへ子どもをつれだし、
充分にその現象を体験させる方法が
ついに書かれ
さらにこの体験を科学的な考え方につなげる
遊びや実験が紹介されています。

2. 科学のふしき②

佐藤善江・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



紙や、コップ、ペットボトルなど、
身近にある材料を使って
楽しいおもちゃをつくりながら、
空気、音、光、磁石などと仲良しにならう。
科学遊びに学べ、新鮮な驚きがいっぱいの
科学遊びを集めています。

3. 自然のふしき

菅原由美子・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



お散歩や遠足で野外でみると、
そこには遊びの宝庫です。どこでも見られる
草花やタネ、カエルたちば
いつも自然遊びの相手をつめてくれます。
そして、水族館や動物園なら
もっとすごい発見があるでしょう。

4. からだのふしき

赤穂由美子・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



動物や人間の「からだ」に関する遊びを
あつめました。
遊びをかいいて見えないものの正体をあてる
遊び、虫に歯があるかな?という好奇心を
そぞろいのかけにつなげ最後には、
がいこつの模型までつくつてしまします。

キンダーブックの
フレーベル館

保育環境論

—幼児の生活の視点から—

幼児を取り巻く保育環境の具体的な事柄について、
“幼児にとってそれは何であるか”の視点からとらえようとしたもの。
粘土や折り紙などの教材からークラスの人数、園舎の構造などまで
幼児の目、心、身になって見直し、
環境が幼児の経験内容の質を左右することを明らかにします。

保育環境論

—幼児の生活の視点から—

原口 純子



原口純子 著

A5判 176頁 定価：本体1,600円+税

キンダーブックの
フレーベル館